

REHACARE 2012 国際介護・福祉機器展
ドイツ・デュッセルドルフ
2012年10月10日～13日



約 **51,000** 名のビジターが **REHACARE** に参加
32 か国から **851** の出展者が介護、福祉機器やサービスを出展
介護ロボットのテーマパークも開催

身体障害者や高齢者の自立した生活のための福祉機器やサービス、リハビリや介護、老化に関する情報の提供など、REHACARE 2012 では今年も関連する幅広い製品群、情報を発信し、10月10日～13日までの4日間、ドイツ、デュッセルドルフのメッセ会場で開催された。

「今年の REHACARE では新たな刺激的テーマを掲げ、来場者の皆さんの更なる期待に応えました」、REHACARE の主催者であるメッセ・デュッセルドルフの取締役、J.シェーファーがコメントしたように、ホール 3 ではフラウンホーファー生産工学自動化研究所 (IPA) による介護ロボットのテーマパークが初めて設置され、高齢者や身体障害者が必要とする介助や支援へのロボット工学の将来的な可能性が提案され、高い評価を受けた。またホール 7 ではドイツの高齢者団体や業界関係者、地元警察の協力のもと、シルバーカーの安全利用についての展示や実演が行われた。

REHACARE2012 には約 51,000 名の業界関係者や障害を持つ個人などが参加した。6 つの展示ホールを 32 か国から 851 の出展者が使用する会場を視察したビジターは、介護、福祉機器の新製品や関連サービスの情報収集や、実際に手に取っての評価を行った。前回の REHACARE2011 のビジター数は 47,000 名。同じテーマとして比較できる前回偶数年の 2010 年は 52,500 名だった。

上述の介護ロボットのテーマパークには介護に関わる支援ロボットや技術の展示発表、デモンストレーションが行われ、



ロボット工学の関係者や、実用化に期待を寄せる利用者からの注目が集まった。日本からは東京理科大学、小林研究室がマッスルスーツを出展。重量物を持ち上げるデモンストレーションを行い、高度な機能を PR した (写真)。

同テーマパークの主催者であるフラウン ホーファー生産工学自動化研究所（IPA）の Dr.グラフは今回の狙いを次のように語り、いずれも達成できたものとコメントした。

- ・プロトタイプから商品化レベルの製品まで、高齢者のためのモバイル支援システムから各種アプリケーション、また重度障害者のための高度なソリューションまで、開発を重ねた様々なレベルの介護向け支援ロボットの適用範囲を、業界関係者や潜在的ユーザーへ PR。
- ・ロボットが人間になり替わることができなくとも、支援可能なツールであることの PR。
- ・機器メーカー向けに身体障害者や高齢者のための支援ロボット製品の開発に必要な技術的ノウハウを PR。

介護福祉機器の専門見本市としての **REHACARE** に対する評価は、今年もビジター、出展者や後援団体から寄せられた。

身体障害者のドイツの全国的な団体である連邦自助協議会（BAG）の専務理事である Dr. ダンナーは、幅広くイノベーティブな製品が多数出展され、身体障害者の自立した生活へのヒントやアイデアが発見できる点を評価した。また、業界や研究者の努力のおかげで介護福祉機器が進化し、少子高齢化の時代が単に脅威でなく、機会を提供してくれているともコメントした。**BAG** はホール 3 に機器メーカーを集めたパビリオンも設置し、高い技術の製品だけでなく、小さな改良を積み重ねた自立支援の日常生活用品を多数展示、日常生活における問題解決を提案した。

ビジターの関心が例年通り高かったのは日用品や車いす、ウエルキャブであり、50%のビジターはこれらの製品に注目した。47%のビジターは歩行器や昇降機など移動に関連する用具、機器に関心を持った。またビジターの 10%は建築、空間設計のエリアを訪問した。



今回の **REHACARE** には 77 か国からビジターが参加した。数ある海外ビジターの中から特に目立ったのは、ロシアの 25 の地域から参加した身体障害者団体や、カザフスタン、ウクライナの代表団など東欧からのグループと、日本からのハイクオリティーなビジターグループだった。

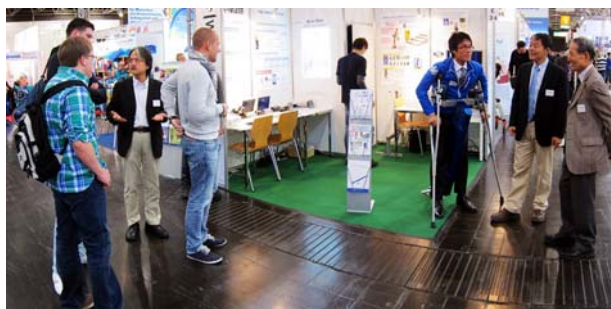
総合的な評価を見てもビジターの95%以上が今回の視察目的が十分に達せられたと評価した。

出展者からは特にビジターの質が評価された。ドイツの大手福祉機器メーカーであるオットーボック・ヘルスケアは「今回の出展でもいくつかの有益な商談をユーザーや顧客と行うことができました。歩行器や昇降機などの移動機器、義手・義足、ニューロステイミュレーション（神経刺激）などの新製品に対する反響が高かったです。特に会期中を通じてハンドサイクルや豊富なバリエーションの小児向け製品も高い注目を集めました。ユーザーや顧客が多数来場する REHACARE は弊社にとって有益な見本市です。」とコメントした。

REHACARE は外国出展企業にとってドイツのみならずグローバルな市場開拓のプラットフォームでもある。日本から3年連続での出展である(株)加地は今回も高機能 GEL 素材ケア製品の世界販売を目的に出展し、次のようにコメントした。「今回で3回目の出展となり、当社の認知度向上を実感できるようになりました。ブースの運営にも慣れ、商談により集中できました。継続して出展することの重要性を強く感じました。」同社では次回2013年の出展も予定している。（写真右上）



日本からは先述の東京理科大学小林研究所、(株)加地をはじめ、東京工業大学、(株)マキライフテックの4社が出展した。歩行支援機械を出展し、技術開発、販売のパートナー



を開拓を目的に参加した東京工業大学は以下のようにコメントした。「福祉先進国ドイツ、欧州の動向を強く感じることができ、またいくつかのコンタクト先を得ることができた」（写真左）

ノルトライン・ヴェストファーレン州（NRW 州）の障害者スポーツ協会（BSNW）などが共同開催した「スポーツセンター」は今回もホール 7a で開催された。ロンドン・パラリンピックが開催された本年はロンドンでのドイツ人メダリストたちがゲストとして参加した。中でも卓球の金メダリスト、ホルガー・ニケリスは身体障

害者のための REHACARE スポーツセンターを高く評価し、パラリンピックで注目を浴びた障害者のスポーツが今後普及していくことに期待を表明した。

株式会社メッセ・デュッセルドルフ・ジャパンは今年も、日本からの来場者向けに高評の日独フォーラムを会期中 10 月 12 日に開催した。参加者は 50 名を数えた。冒頭、メッセ・デュッセルドルフ本社の取締役、シェーファーの挨拶後、ブレーメン大学



リハビリテーションロボット研究グループのプロジェクトリーダー、T. ハイヤーが介護分野におけるロボット技術について発表、横浜市総合リハビリテーションセンター、渡邊先生がコメントして、パネルディスカッション形式で意見交換をおこなった。続いてドイツ介護連盟理事、K. フロインドが「福祉用具安全性の確保：現場での対応」をテーマに、利用の実習をメインに発表。日本福祉用具・生活支援協会の清水理事も日本の事情に触れ、同様にパネルディスカッションを行い、日独の相違点や共通点から、今後の課題、解決方法など多岐にわたって意見交換がなされた。

来年のフォーラムは発表とパネルディスカッションに加え、ドイツの業界関係者とのビジネスマッチングを目的とした懇親会も開催する予定。

日独フォーラムの発表資料は[こちら](#)。

次回 REHACARE は 2013 年 9 月 25 日～28 日にデュッセルドルフで開催される。

REHACARE に関する日本でのお問い合わせは：

株式会社メッセ・デュッセルドルフ・ジャパン

担当：服部

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町 4-1

ニューオータニガーデンコート 7F

Tel. 03-5210-9951 Fax. 03-5210-9959

mdj@messe-dus.co.jp

www.messe-dus.co.jp

<http://rehacare.co.jp>